



弘大農学部同窓会会報

第 8 号

昭和62年6月30日 発行
発行 弘前大学農学部同窓会
TEL. 0172-36-2111
振替 盛岡4-564番
印刷 双葉タイプ所

面目改まった附属農場

名誉会長 田 辺 良 則

現在、農学部で一番のホット・ニュースは農場施設の完成であろう。6月15日関係者にお集り頂き、竣工式を挙げてお祝いしたばかりである。

機会が得られないままに、十年に余って訪問することのなかった農場であったが、藤崎・金木両農場とも、面目一新、往年の面影をとどめるものは、とど松の並木（藤崎）と樹々に覆われた岡のたたずまい（金木）だけであった。

園地も畑地も水田も整然としており、建物も施設も機械もピカピカに見えた。大学の附属農場といえば、学部教官などの試験栽培と学生実習に追われて手が廻らず、悪しき見本・反面教師というのが相場というのに、これはまた、何という見事さであろう。

藤崎の圃場では、リンゴ園の充実ぶりが一際目を引いた。なかでも、マルバカイドウを台木とする半わい化栽培圃はまことに見事であった。時流に流されず、権威におもねらず、理論と実際を追求した、大学・大学人ならではの成果が示されていると思われた。主としてこれを見るための見学・研修者が年間3千人にのぼったというが、むべなるかなである。

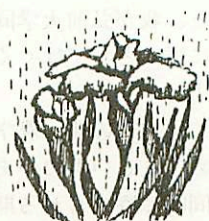
金木の家畜では、乳牛の清潔さに驚かされた。鎧をまとうとって、お尻の周辺に毛にこびりついた牛糞は見苦しいものであるが、わが農場の乳牛にはその痕跡もなく、つややかに清潔感に溢れていたのである。人手不足

の深刻な農場というのにとすると、場員の家畜への愛情が感じられて、ジンとくるものがあった。

かつての青年は壮年となり、壮年は熟年となっていて、多くは久闊を叙する仕儀ともなったが、森農場長以下24名の場員、皆プロなんだなと思った。もちろん、農繁期には臨時雇も入れるのであるが、約でいうと果樹園10ha、菜園3ha、水田7ha、畑15ha、耕地計35ha、乳牛30頭、肉牛19頭、豚7頭、羊31頭、家畜計57頭の面倒を見て、しかも、行き届いているのである。技術と熟練と愛情なくしては実現することのできないものと、私は見た。

建物、施設、機械もまたよく整備され、わが農場30年の歴史の上でも、画期的な到達点を示している。

57年から61年まで5ヵ年がかりの建築は、量的にも質的にも素晴らしいものとなって、研究と教育の中身を量質ともに飛躍させるに相応しいものとなっている。学部・農場教職員のみならず、協力が期待されているのである。



農学部同窓会会長就任ごあいさつ

同窓会会長 岩井 邦彦

風薫る5月……今、田植の真最中、しかし日本農業に吹き寄せる風は一層冷たく、外圧はとどまるところを知らない。

青森県では4月から5月にかけて襲った異常低温の凍霜害でりんごやすいかなどが大被害を蒙った。4月26日には積雪があり、7分咲きの桜の花見と雪見が一緒にできると云う珍現象に訪ずれた観光客がびっくり!

内憂外患、八方ふさがりと云える厳しい状況下で、かつてない変革に直面している国内農業です。

しかし、日本国民にとって、国内農業は無くしてはならない重要な産業であることに変わりないわけです。

その意味でも、わが同窓生諸兄の各方面でのご活躍を願っているこの頃であります。

私は、5月24日の総会において、地元在住者であることからか、会長にご推挙いただき、大変光栄に存じますと共に、責任の重さを感じております。

同窓会発会以来コンビを組んで今日まで、約30年間の永きにわたり、会長、副会長を務められた横山宏、土岐政雄両氏のこれまでのご苦勞をいまさらながら思い、心からの敬意と感謝の意を表する次第であります。

加えて、大学在職の事務局幹事の皆様には縁の下の力持ちの役割をいともせず、ご多忙な学究の時間をさいて、事務処理に当たっていただいておりますが、これまた、心からの感謝とおねぎらいを申し上げます。

おかげさまで、この30年間につちかわれた、我が弘前大学同窓会の伝統は、今後さらに脈々としてはぐくまれて行くものと信じます。

又、この間、農学部の学科、講座の充実はめざましいものがあり、教官数も大幅に増え同時に寄せられる期待と責務もそれだけ重く

なったのであります。

このたびの総会において、会員各位のご協力により会計規模も拡大し、同窓生が約2千6百人にもなり、支部の数も増えたことから副会長1名、監事1名の増員、評議員定数も25名以内への5名増員の規約改正も承認されました。

農学部の発展に合せての同窓会組織の強化がはかられたのであります。

農学部創設30周年記念に、シンボルとして建立された記念彫塑は、同時に植えられた記念樹と共に、末永くこれを守り、その成育を見つめて参りたいと存じます。

いずれにしましても、新役員一同は、事務局新幹事の皆さんのご協力により、評議員各位のご提言とご教示のもとに、同窓会規約にあるとおり、母校農学部の発展と同窓生の連携連絡の場として、これまで拡大してきた同窓会の一層の充実を期し、前会長さん等のお力を引継ぎ努力する所存でありますので、皆様のお力添えをお願い申し上げます。

特に新役員は、不馴なことでもありますので、幹事の戸次助教授ほかお二方には、いろいろご苦勞をおかけすると思っておりますがよろしく願います。

末尾になりましたが、母校農学部が基礎研究と共にその特色である地域農業貢献の方針を掲げて一層の発展を祈念すると共に、同窓生各位のそれぞれのお立場でのご活躍とご多幸をお祈り申し上げ、ごあいさつといたします。



同窓生と農学部関係者に感謝

同窓会前会長 横山 宏

去る5月24日、弘前市内第一ホテルで開催された同窓会総会において、同窓会長退任が承認され岩井邦彦新会長が誕生しました。

30有余年にわたって弘前大学関係者及び同窓生諸氏並びに御協力をいただいた多数の方々には心から御礼を申し上げます。

会長職退任はかねてから長期にわたったこと及び30周年記念行事を1つの節目と考えていたからで他意はなく、事務局の御尽力で運営も一応安定路線が敷かれましたので次期会長にバトンタッチした次第であります。

弘前大学農学部創設以来近年までの経緯変遷のほか思い出等は357ページに及んだ記念誌「30年のあゆみ」に集約されてありますので重複を避けませんが、一口に30年、今振り返って何と月日の過ぎるのが早いことか、何をどのようにまとめて書こうかと戸惑いを覚え、改めて年齢を感じさせられます。

我々農学を志して弘前大学農学部籍を置いた頃国産の食糧が不足で援助輸入食糧で賄っていたため、自給食糧確保の為に国をあげて必死に増産に取り組んでいた時代で質より先づ量で農耕地の拡大と増産に向けて品種開発と栽培技術試験が優先され国家投資もなされたものでした。

農地の細分化を防ぐ為海外引揚者及び農家の次三男対策としての開拓行政等は正に花形で都会派からは何らの異論もなかったように記憶しております。開墾適地は法律によって格安に国が地主から取上げていた時代です。学卒後、直ちに開拓行政に従事し山野を駆け回り文字通り足で稼いだ日々、地図とボーリングステッキを手に連日30キロ前後は歩けたのも使命感と若さのせい。車社会でなかったこともあるが。

卒業ホヤホヤの時だけに大学の勉強は社会では直接的でなく悩んだことがしばしば、時には情なくなることもあったのだが、(人によっては専門の道をそのまま進む人もいるが)

時間が経過するにつれ、大学での学問知識というものは、物の見方、考え方、取組み方を覚え、深める為のステップだったのだと悟るようになってきます。又、学生数の少なかった我々の頃には教職員との肌の触れ合いを通じて人間的な、社会的なセンス・オブ・プロポーションが高められる機会が多かったのではないかと、最近の大学卒の若い人々を見るにつけ感ずるのですが、古き良き時代の末期に在学したことを幸に思っています。

日本の経済状態は前述の30有余年前とは大きく変わってしまい、高度経済成長の結果世界最大の黒字国となった結果、国際的にも国内的にも成長に伴う陰の部分が目立つようになっておりますが、なかでもコメいじめに代表される農業批判の嵐は外国からの理不尽とも見られる要求、更には呼応するように日本の財界、言論界が悪乗りしているのには一理あるとは言え憤りを感じずるものであります。

言う迄もなく科学の進歩と国際化の進行はより効率的なもの、より企業的な方向を模索する傾向を強めるでしょうが、農業或は食糧の持つ意識、果たす多面的役割を忘れてはならないし、農業自体の体質改善、発想の転換による今日的可能性への挑戦によりソフト型の最先端産業になってこそ、農業の活性化が可能だと思っております。

気力と体力があれば成り立っていた農業はもはや終りに近づいています。

知力が要求され、頭脳労働も付加されて初めて素晴らしい農業ができると思います。

個々の農業技術を問題視するより重要なことは発想の転換ではないでしょうか。

同窓生諸兄は新しい考え方で人間性を失うことなく可能性を追求して行く積極型人間になって欲しいと念願する次第です。

同窓会の今後の発展と関係諸氏の御健勝と御活躍を期待して止みません。退任に際しこれ迄の御理解と御協力に改めて感謝します。



今にして卒業生に教えられる

弘前大学名誉教授 佐々木 信 介

テレビや新聞等で卒業生の顔を見たりすると、思わず嬉しくなることが多い。今日（5月30日）の夕刊にも、教室の卒業生に関係したことが2つ載っていた。その1つはN君が県農試で育成した「華吹雪」こそ名酒米という記事である。このN君は卒業と同時にフジ製糖に入社した。しかし同社が六戸の工場を閉鎖することになり、退職せざるを得なくなった。大きな希望と期待を抱いて入社したにも拘わらず、僅か数年で離職の憂き目を見た彼の失意の程が察せられる。だが彼は一念発起して県の採用試験に挑戦し見事合格した。県に入ってからには年来の希望である研究職に専念し、水稻の品種育成と栽培技術の改善に精進している。

もう1つは記事ではなくて「入園無料・あやめまつり」という広告である。このあやめというのはジャーマンアイリスのことであり、園主は卒業生のN君である。彼の現職は教師であるが、今やジャーマンアイリスにかけては日本一の専門家であり、コレクターでもある。従って開花期には全国から見物にくる程である。彼は在学中老祖母を養い、養鶏によって学資と生活費を得ていた。普通なら苦学生といえど何となく暗さが滲むものであるが、彼はそうではなかった。明るく積極的であった。4年の夏休み（今から30年前）に自転車で九州まで単独走破した。それは自分の意志と体力を確認するためであった。そのようなことが今日のアイリス王となる基礎にもなっているのではなからうか。

夕刊を見ながら卒業生の偉大さを懐想していると、次々に同じような卒業生の名が浮かんでくる。Y君は弘前の出身であるが北海道の改良普及員になった。一人息子の彼は両親の希望もあり、青森県に転出したいと思って

いた。しかしその機会は得られず、苦悩の末退職し弘前に戻り、そこで年来の希望である教員になるべく聴講生となった。努力の甲斐あって教員の資格は取れたが採用には至らず、中学の臨時教師として県内を移り変っていた。その頃某農業高校から急に臨時講師の話があり彼に伝えた。そうなれば自宅から通うこともでき、母上（父親は御逝去）は殊のほか強く希望された。しかし彼はその話を断った。彼にとっても有難い話ではあるが、現在の中学に採用に際しての義理と教え児への愛情からである。彼はその年の高校教員の採用試験に合格し、教諭として活躍中である。

T君もすばらしい人物である。彼は卒業と同時に青森県の上級職に合格し、同僚や上司からも厚い信頼を得ていた。そのような彼が3年後にはN県の採用試験を受け、合格後はN県に移った。その理由は何であったのか。彼は在学中から交際していた女子学生がおり、卒業後も二人の愛情は変わりなく強いものであった。この相手の出身地はN県であり、卒業後は郷里で勤めていた。二人の愛情を結実させ結婚を実現させるため悩み抜いた彼は、意を決してN県への転出を考えた。現職の身分で移動は不可能と知り、N県の上級職に挑み成功を勝ち得て、就職し、結婚を果したのである。

このように逆境不運にもめげず、自分の信ずる道を堂々と逞しく生き抜いている卒業生は数多く、上述の4君などはほんの一例に過ぎないであろう。退官してはや2ヵ月。在職中の思い出となれば、やはり学生諸君との関わりが多い。その中でこのような多くの偉大な卒業生に恵まれた私は幸せであり、それら諸兄の美しくも力強い生き方を教訓にして、私の餘生を送りたいものである。

定期総会報告

— 昭和60・61年度事業報告ならびに会計報告 —

S 62. 5. 24 於・弘前市

1. 事業報告

- (1) 会員名簿61年版作成、61年11月20日発行
- (2) 支部活動支援 支部創立…秋田支部
開催…福島、関東、下北の各支部
- (3) 会報6号、7号発行
- (4) 新正会員歓迎会後援 2回

2. 昭和60・61年度会計報告

収入の部		
59年度繰越金		1,622,465円
一般会費(971名分)		2,942,450
人会金(196名分)		804,330
広告料		80,000
貯金利子		101,877
30周年記念誌売上金		25,696
計		5,576,818

支出の部		
会員名簿発行費		1,830,800円
会報発行費		791,370
新会員歓迎費		445,680
支部後援費		316,940
会議費		276,120
庶務・管理費		360,125
通信・印刷費		238,268
消耗品費		6,958
慶弔費		20,810
計		4,287,071

3. 規則改正

評議員数をこれまでの20名以内から25名以内へ変更

4. 新年度役員の改選 (○は新任)

会長 ○岩井邦彦(32,弘前市役所)
 副会長 ○中尾良仁(32,青森県庁)、○今 哲広(42,電技工業)
 監事 中村良三(33,青森県庁)、○扇田 実(33,青森県庁)、
 ○三浦 慧(38,三浦酒造店)
 評議員 佐藤 孝(34,青森県庁)、米谷誠治(39,青森県庁)、山崎
 季好(39,青森農試)、鎌倉二郎(39,青森県りんご試、野
 村忠弘(35,青森県畜試)、栗生和夫(32,青森県畑園試)、
 丸島 仁(46,青森県中央会)、及川 博(47,青森県農業
 会議)、久保 惇(34,八戸市役所)、核庭誠蔵(36,弘前市
 役所)、○吉尾晴雄(35,青森市役所)、木村郁夫(47,きむ
 ら種苗)、蒔苗龍一(45,東北建設コンサル)、成田常雄(33,
 柏木農高)、外崎勇七(34,柏木農高)、大場真紀(38,芝管
 工)、尾崎一美(44,弘前市農協)、原田順厚(31,弘大農学
 部)、○古川高年(35,古川ガラス工業)、○相馬敬光(45,
 佐々木農機)、○渡辺 繁(39,農業自営)、○佐々木武信
 (47,農業自営)、○小槌央邦(40,三本木農高)、○工藤博
 喜(54,尾上農協)、○山田育夫(52,東北農政局)、以上25名。
 幹事 ○戸次英二(33,総務担当)、○村山成治(40,情報担当)
 藤田 隆(45,会計担当)

— 昭和62・63年度事業ならび予算 —

1. 事業計画

- (1) 同窓会名簿(63年度版)を63年11月末に発行する。
- (2) 新支部創設の支援、および既設支部の活動を後援するため教官と役員を要請により派遣する。
- (3) 会報を年1回発行する。
- (4) 新会員(卒業生)歓迎行事を後援する。
- (5) 母校の環境整備のため、2年で20万円(年10万円ずつ)を援助する。

2. 昭和62・63年度予算計画

収入の部		
61年度繰越金	1,289,747円	
一般会計	3,000,000	@ 3,000×1,000名
人会金	1,300,000	@ 5,000×260名
広告料	270,000	
計	5,859,747	

支出の部

会員名簿発行費	2,400,000円	63年度版
会報発行費	600,000	年1回発行
新会員歓迎費	450,000	卒業祝賀会 他
支部後援費	500,000	
母校環境整備費	200,000	植樹後の管理
会議費	200,000	
庶務・管理費	550,000	名簿管理料
通信・印刷費	200,000	
予備費	759,747	
計	5,859,747	

教室だより

《附属農場の紹介》

農場は、南津軽郡藤崎町にある藤崎農場と北津軽郡金木町にある金木農場とからなり、それぞれ学部から車で20分、75分の距離にある。

藤崎農場は、果樹と蔬菜の園芸農場で、その中心作物は地域特産物のリンゴで、面積8ha、品種数120、総本数約1,200樹、年間生産量約7,000箱と、リンゴの教育と研究に質・量ともに万全の体制をもっている。

金木農場は、基盤整備された水田の上に、稲作の機械化一貫作業体系が確立し、単収も安定しており、教育効果も高い。また地力の低かった飼料畑は、厩肥の連年施用によって生産力が増し、少頭数飼育でも飼料不足をかこつたのは遠い過去のものとなり、現在は29頭の乳牛を含む4畜種77頭の粗飼料のみならず、一部濃厚飼料の自給までも可能になっている。

一方、施設設備の整備は昭和57年度から漸く始まり、61年度末までに両農場合せて10施設の建築が進められ、今年6月15日に竣工式が行われた。かくして旧農林省時代(藤崎)、旧青森県時代(金木)の木造の老朽建物は一新された。

主な建物の構造と規模は下表の通りである。藤崎農場では、①40～80人聴講可能な講義室を含む研究管理棟、②ジャム・ジュース・ワイン・味噌などの加工設備を有する加工舎、③大農具舎等が新営され、④冷蔵庫は増築されフォークリフトによる積荷作業が可能となった。金木農場では、⑤総畳数99畳、40人の収容可能な宿泊管理棟を始め、⑥2基のスチールサイロ、パイプラインミルクカー等の設備を持つ32頭係留ストールバーンキング式牛舎、⑦牛舎から圧送される原乳をバック詰

藤 崎 農 場

No.	施設名	建設年度	様式	面積
①	研究管理棟	57	RC2	901㎡
②	園芸加工舎	57	S1	280
③	冷蔵庫	46・57	S1	112
④	大農具舎	57	S1	200

RC：鉄筋 S：木造
W：鉄骨造り 数字は階数

め加工する乳加工舎、⑧育苗作業場、ライスセンターシステム、自給飼料のペレット飼料調製設備室、雨天実習場、その他多くの目的と機能を持つ農産加工調製舎、⑨大小合わせて98機種以上の農機具を収納する農具舎、⑩肉牛・豚・羊を飼養目的に応じてペン構造を変え、単飼・群飼いづれも可能な畜舎等、全て新営された。しかも、国家財政困難な折りにもかかわらず、多くの希望がかなえられ、他大学農場に比して優れるとも劣らぬ諸設備を有し、農場としての新たな飛躍台に立った感がある。

しかし、相離れた2農場とも事業量が大きく、かつ補完し合うことが難しいので、定削の嵐の中での人員不足が最大の悩みである。6次にあたる10人減の定削に対して、その都度作目の変更や一部切捨て、農作業法の改善により、克服してきたが、既に教育、研究機能を阻害する状況まで深刻化している。

教育と研究の実績と実態については、一昨年発行された『30年のあゆみ』に詳しく掲載してあるが、特にリンゴの半密植栽培の研究は、地域農家に直接役立つ成果をも挙げており、年間数千人の見学研修者を迎える状況にある。

以上紙面の都合上、概略を紹介するに留まったが、詳細については全国大学付属農場協議会発行の大学農場年報第19号を参照して頂きたい。

最後に、御来青、御来弘の折りには気軽に両農場にお立ち寄り下さることを願うと共に、同窓会会員諸兄の御発展、御活躍を祈りながら置筆する。

(村山 記)

金 木 農 場

No.	施設名	建設年度	様式	面積
⑤	宿泊管理棟	59	RC2	980㎡
⑥	乳加工舎	59	S1	209
⑦	乳牛舎	59	W2	455
⑧	加工調製舎	61	S1	833
⑨	農具舎	61	R1S1	968
⑩	家畜舎	61	W1	210

支部だより

— 秋 田 県 支 部 発 足 —

1. 支部結成までの経緯

本県における支部結成の気運は以前からあったが、地形が南北に長いことと、県民性が成せる技なのか話が出ては消えの繰り返しであった。

こうしたなかで、昭和61年1月に県農業短期大学の松本氏らの呼掛けで、初めての同窓生新年会が秋田市内で催され、20名が参加した。新年を祝うとともに、同窓生の消息、恩師の消息が話の中心となり、今後、このような機会を持ちたいと言う意見が出され、秋田県支部結成に向けて前進することが確認され、準備委員が選出された。

NHK大河ドラマ「いのち」が放映され、あの懐かしい岩木山、津軽平野、弘前城等々を見るにつけさらに気運は高まった。

昭和62年に入り、準備委員会の名で選挙なみの電話作戦で、支部結成準備会への出席の有無と、支部結成の賛否について問いかけた結果、約70名の有資格者中65名と連絡が取れ準備会参加希望者26名を含め、全員の賛同を得た。

2月7日、秋田市内みずほ苑において開催された「弘前大学農学部同窓会秋田県支部結成準備会」において支部結成案について計

たところ、満場一致で支部結成の運びと成り、その席で支部会則の成立と、支部役員の選出がなされた。

2. 支部の内容

会員相互の親睦を図ることはもちろん、会員名簿の作成等については他支部と同様の活動を行う。

秋田県が南北に長いので、支部の事務局員を県北、中央、県南に配置し、支部の活動をスムーズに行えるよう配慮している。

支部役員も各年代、各教室出身者といった具合に教室全般に求めた。

先輩、後輩のなかであって、皆同じ釜の飯を食べた仲間としてお互いに率直に意見が言える支部である。

(準備委員 丹波 記)



— 関 東 支 部 (北 溟 会) —

61年6月21日、北溟会総会に出席する機会を得た。当日はゲストに木村文理学部東京同窓会事務局長も出席されていた。33卒笹島、35卒安倍、勝間田氏ら25名を越える会員が参加されていたと記憶する。

30年代から50年頃の会員の中では卒業後初めて会う懐かしい顔もあり、適度に進む酔いのせいも加わり、壇論風発、話がはずんだ。見ていると話の渦がクラブのあちこちにでき、渦の中の顔ぶれが、しばらくすると変わっている。卒業年次にこだわり無く、話がはずんで

いることを知ることができ、同窓であると言うことは現在の仕事に関係なく社会人としての会話に花を咲かせる。これが同窓会なのだと思わず感じたのであった。

1年に1度か2度の、このような会への出席は人をいくらかりフレッシュしてくれるのではなかろうか。

翌日の日曜日早朝、久しぶりに明治神宮に友達と行き、盛りの花菖蒲に堪能した反面、延々と続く人の列に疲れ果てたのであった。

(篠辺 記)

— 福島支部（わんどの会） —

思いがけなく福島県支部同窓会の出席の依頼で郡山へ出かけました。教室の卒業生は2人だけですので、出席はいささか気が重かったのですが、支部長さんをはじめ皆様の温いおもてなしを受け楽しい思い出になりました。福島県支部は支部長以下、役員御一同のチームワークもすばらしく立派な同窓会であることを感じました。各地にこの様な組織ができることは農学部発展につながると思います。もう一つ印象深かったことは、農学部校舎の

古い写真にかん声をあげていたことです。今後この様な会合に出かける教官の方には是非30年の歩みをスライドにしたものを持参できるようになることを望みます。金木農場や藤崎農場の移り変わりなどは新旧の卒業生に深い感動を与えるでしょう。どうか事務局の指導によって各地に同窓会支部が設立されることを望みます。最後に福島支部の皆様の御多幸をお祈りし、支部の一層の発展を祈念致します。（沢村 記）

— 下北支部総会に出席して —

年末・年始は暖冬少雪でしのぎやすかったが、去る1月10日の下北支部総会出席の帰路は雪で大変でした。総会そのものは、むつ市を中心に下北半島在住の同窓生20名中、昭和33年卒業平井正和氏、都谷森五郎氏をはじめ、教員3名、下北地方農林事務所2名、農業改良普及所4名、むつ市役所2名、東通村役場1名、肉用牛開発公社1名の計13名が出席し、市内料理店「王将」でシーフードを前にして挨拶、自己紹介等が続き懇親会に移り、アルコ

ールがまわったところで記念撮影。二次会も全員参加で氣勢をあげたところまではよかったが翌朝起きてびっくり。夜半に静かに降った雪が何と20センチもあり、日曜日であったことから除雪の行き届いてない道路を150キロ走りやっとの思いで弘前に帰ったが、雪道ドライブの思い出は強烈に残ります。下北支部の皆さんに感謝すると共に今後の発展を祈って止みません。

（横山 記）

編集後記

本州はすっぱり梅雨に包まれてしまい、うっとおしい毎日が続いておりますが、植物にとっては真に恵みの雨となりそうです。

本学部同窓会も役員顔触れが一新し、一昨年の30年記念事業で農学部が新しい第一歩を踏み出したとするならば、我同窓会としては今年から新たな「あゆみ」を始めたということになるでしょう。

本当に長期間会長、副会長の任をお引受けいただきました横山宏、土岐政雄両先輩には心より感謝いたします。会報担当も次号から村山氏（情報担当幹事）にバトンタッチいたします。引き続き御協力の程よろしくお願い致します。（6.20 A・K 記）

学内人事

佐々木信介教授 退官

慶事

佐々木信介教授
青森県褒賞（S 61.12.4 受賞）

弔事

田中 優（43・園芸産物利用学卒）

中村 俊也（45・農業水利学卒）

平山 弘美（62・農業造構施設学卒）

農学部同窓会会長就任ごあいさつ

同窓会会長 岩井 邦彦

風薫る5月……今、田植の真最中、しかし日本農業に吹き寄せる風は一層冷たく、外圧はとどまるところを知らない。

青森県では4月から5月にかけて襲った異常低温の凍霜害でりんごやすいかなどが大被害を蒙った。4月26日には積雪があり、7分咲きの桜の花見と雪見が一緒にできると云う珍現象に訪ずれた観光客がびっくり!

内憂外患、八方ふさがりと云える厳しい状況下で、かつてない変革に直面している国内農業です。

しかし、日本国民にとって、国内農業は無くしてはならない重要な産業であることに変わりないわけです。

その意味でも、わが同窓生諸兄の各方面でのご活躍を願っているこの頃であります。

私は、5月24日の総会において、地元在住者であることからか、会長にご推挙いただき、大変光栄に存じますと共に、責任の重さを感じております。

同窓会発会以来コンビを組んで今日まで、約30年間の永きにわたり、会長、副会長を務められた横山宏、土岐政雄両氏のご苦労をいまさらながら思い、心からの敬意と感謝の意を表する次第であります。

加えて、大学在職の事務局幹事の皆様には縁の下の力持ちの役割をいともせず、ご多忙な学究の時間をさいて、事務処理に当たっていただいておりますが、これまた、心からの感謝とおねぎらいを申し上げます。

おかげさまで、この30年間につちかわれた、我が弘前大学同窓会の伝統は、今後さらに脈々としてはぐくまれて行くものと信じます。

又、この間、農学部の学科、講座の充実はめざましいものがあり、教官数も大幅に増え同時に寄せられる期待と責務もそれだけ重く

なったのであります。

このたびの総会において、会員各位のご協力により会計規模も拡大し、同窓生が約2千6百人にもなり、支部の数も増えたことから副会長1名、監事1名の増員、評議員定数も25名以内への5名増員の規約改正も承認されました。

農学部の発展に合せての同窓会組織の強化がはかられたのであります。

農学部創設30周年記念に、シンボルとして建立された記念彫塑は、同時に植えられた記念樹と共に、末永くこれを守り、その成育を見つめて参りたいと存じます。

いずれにしても、新役員一同は、事務局新幹事の皆様のご協力により、評議員各位のご提言とご教示のもとに、同窓会規約にあるとおり、母校農学部の発展と同窓生の連携連絡の場として、これまで拡大してきた同窓会の一層の充実を期し、前会長さん等のあとを引継ぎ努力する所存でありますので、皆様のお力添えをお願い申し上げます。

特に新役員は、不馴なことでもありますので、幹事の戸次助教教授ほかお二方には、いろいろご苦労をおかけすると思っておりますがよろしく申し上げます。

末尾になりましたが、母校農学部が基礎研究と共にその特色である地域農業貢献の方針を掲げて一層の発展を祈念すると共に、同窓生各位のそれぞれのお立場でのご活躍とご多幸をお祈り申し上げ、ごあいさつといたします。





弘大農学部同窓会会報

第 8 号

昭和62年6月30日 発行
発行 弘前大学農学部同窓会
TEL. 0172-36-2111
振替 盛岡4-564番
印刷 双葉タイプ所

面目改まった附属農場

名誉会長 田 辺 良 則

現在、農学部で一番のホット・ニュースは農場施設の完成であろう。6月15日関係者にお集り頂き、竣工式を挙げてお祝いしたばかりである。

機会が得られないままに、十年に余って訪問することのなかった農場であったが、藤崎・金木両農場とも、面目一新、往年の面影をとどめるものは、とど松の並木（藤崎）と樹々に覆われた岡のたたずまい（金木）だけであった。

園地も畑地も水田も整然としており、建物も施設も機械もピカピカに見えた。大学の附属農場といえば、学部教官などの試験栽培と学生実習に追われて手が廻らず、悪しき見本・反面教師というのが相場というのに、これはまた、何という見事さであろう。

藤崎の圃場では、リンゴ園の充実ぶりが一際目を引いた。なかでも、マルバカイドウを台木とする半わい化栽培圃はまことに見事であった。時流に流されず、権威におもねらず、理論と実際を追求した、大学・大学人ならではの成果が示されていると思われた。主としてこれを見るための見学・研修者が年間3千人にのぼったというが、むべなるかなである。

金木の家畜では、乳牛の清潔さに驚かされた。鎧をまとうとって、お尻の周辺の毛にこびりついた牛糞は見苦しいものであるが、わが農場の乳牛にはその痕跡もなく、つややかに清潔感に溢れていたのである。人手不足

の深刻な農場というのにとすると、場員の家畜への愛情が感じられて、ジンとくるものがあった。

かつての青年は壮年となり、壮年は熟年となっていて、多くは久闊を叙する仕儀ともなったが、森農場長以下24名の場員、皆プロなんだなと思った。もちろん、農繁期には臨時雇も入れるのであるが、約でいうと果樹園10ha、菜園3ha、水田7ha、畑15ha、耕地計35ha、乳牛30頭、肉牛19頭、豚7頭、羊31頭、家畜計57頭の面倒を見て、しかも、行き届いているのである。技術と熟練と愛情なくしては実現することのできないものと、私は見た。

建物、施設、機械もまたよく整備され、わが農場30年の歴史の上でも、画期的な到達点を示している。

57年から61年まで5ヵ年がかりの建築は、量的にも質的にも素晴らしいものとなって、研究と教育の中身を量質ともに飛躍させるに相応しいものとなっている。学部・農場教職員とのさらなる協力が期待されているのである。



同窓生と農学部関係者に感謝

同窓会前会長 横山 宏

去る5月24日、弘前市内第一ホテルで開催された同窓会総会において、同窓会長退任が承認され岩井邦彦新会長が誕生しました。

30有余年にわたって弘前大学関係者及び同窓生諸氏並びに御協力をいただいた多数の方々には心から御礼を申し上げます。

会長職退任はかねてから長期にわたったこと及び30周年記念行事を1つの節目と考えていたからで他意はなく、事務局の御尽力で運営も一応安定路線が敷かれましたので次期会長にバトンタッチした次第であります。

弘前大学農学部創設以来近年までの経緯変遷のほか思い出等は357ページに及んだ記念誌「30年のあゆみ」に集約されてありますので重複を避けませんが、一口に30年、今振り返って何と月日の過ぎるのが早いことか、何をどのようにまとめて書こうかと戸惑いを覚え、改めて年齢を感じさせられます。

我々農学を志して弘前大学農学部へ籍を置いた頃国産の食糧が不足で援助輸入食糧で賄っていたため、自給食糧確保の為に国をあげて必死に増産に取り組んでいた時代で質より先づ量で農耕地の拡大と増産に向けて品種開発と栽培技術試験が優先され国家投資もなされたものでした。

農地の細分化を防ぐ為海外引揚者及び農家の次三男対策としての開拓行政等は正に花形で都会派からは何らの異論もなかったように記憶しております。開墾適地は法律によって格安に国が地主から取上げていた時代です。学卒後、直ちに開拓行政に従事し山野を駆け回り文字通り足で稼いだ日々、地図とボーリングステッキを手に連日30キロ前後は歩けたのも使命感と若さのせい。車社会でなかったこともあるが。

卒業ホヤホヤの時だけに大学の勉強は社会では直接的でなく悩んだことがしばしば、時には情なくなることもあったのだが、(人によっては専門の道をそのまま進む人もいるが)

時間が経過するにつれ、大学での学問知識というものは、物の見方、考え方、取組み方を覚え、深める為のステップだったのだと悟るようになってきます。又、学生数の少なかった我々の頃には教職員との肌の触れ合いを通じて人間的な、社会的なセンス・オブ・プロポーションが高められる機会が多かったのではないかと、最近の大学卒の若い人々を見るにつけ感ずるのですが、古き良き時代の末期に在学したことを幸に思っています。

日本の経済状態は前述の30有余年前とは大きく変わってしまい、高度経済成長の結果世界最大の黒字国となった結果、国際的にも国内的にも成長に伴う陰の部分が目立つようになっておりますが、なかでもコメいじめに代表される農業批判の嵐は外国からの理不尽とも見られる要求、更には呼応するように日本の財界、言論界が悪乗りしているのには一理あるとは言え憤りを感じずるものであります。

言う迄もなく科学の進歩と国際化の進行はより効率的なもの、より企業的な方向を模索する傾向を強めるでしょうが、農業或は食糧の持つ意識、果たす多面的役割を忘れてはならないし、農業自体の体質改善、発想の転換による今日的可能性への挑戦によりソフト型の最先端産業になってこそ、農業の活性化が可能だと思っております。

気力と体力があれば成り立っていた農業はもはや終りに近づいています。

知力が要求され、頭脳労働も付加されて初めて素晴らしい農業ができると思います。

個々の農業技術を問題視するより重要なことは発想の転換ではないでしょうか。

同窓生諸兄は新しい考え方で人間性を失うことなく可能性を追求して行く積極型人間になって欲しいと念願する次第です。

同窓会の今後の発展と関係諸氏の御健勝と御活躍を期待して止みません。退任に際しこれ迄の御理解と御協力に改めて感謝します。



今にして卒業生に教えられる

弘前大学名誉教授 佐々木 信 介

テレビや新聞等で卒業生の顔を見たりすると、思わず嬉しくなることが多い。今日（5月30日）の夕刊にも、教室の卒業生に関係したことが2つ載っていた。その1つはN君が県農試で育成した「華吹雪」こそ名酒米という記事である。このN君は卒業と同時にフジ製糖に入社した。しかし同社が六戸の工場を閉鎖することになり、退職せざるを得なくなった。大きな希望と期待を抱いて入社したにも拘わらず、僅か数年で離職の憂き目を見た彼の失意の程が察せられる。だが彼は一念発起して県の採用試験に挑戦し見事合格した。県に入ってからには年来の希望である研究職に専念し、水稻の品種育成と栽培技術の改善に精進している。

もう1つは記事ではなくて「入園無料・あやめまつり」という広告である。このあやめというのはジャーマンアイリスのことであり、園主は卒業生のN君である。彼の現職は教師であるが、今やジャーマンアイリスにかけては日本一の専門家であり、コレクターでもある。従って開花期には全国から見物にくる程である。彼は在学中老祖母を養い、養鶏によって学資と生活費を得ていた。普通なら苦学生といえど何となく暗さが滲むものであるが、彼はそうではなかった。明るく積極的であった。4年の夏休み（今から30年前）に自転車で九州まで単独走破した。それは自分の意志と体力を確認するためであった。そのようなことが今日のアイリス王となる基礎にもなっているのではなからうか。

夕刊を見ながら卒業生の偉大さを懐想していると、次々に同じような卒業生の名が浮かんでくる。Y君は弘前の出身であるが北海道の改良普及員になった。一人息子の彼は両親の希望もあり、青森県に転出したいと思って

いた。しかしその機会は得られず、苦悩の末退職し弘前に戻り、そこで年来の希望である教員になるべく聴講生となった。努力の甲斐あって教員の資格は取れたが採用には至らず、中学の臨時教師として県内を移り変っていた。その頃某農業高校から急に臨時講師の話があり彼に伝えた。そうなれば自宅から通うこともでき、母上（父親は御逝去）は殊のほか強く希望された。しかし彼はその話を断った。彼にとっても有難い話ではあるが、現在の中学に採用に際しての義理と教え児への愛情からである。彼はその年の高校教員の採用試験に合格し、教諭として活躍中である。

T君もすばらしい人物である。彼は卒業と同時に青森県の上級職に合格し、同僚や上司からも厚い信頼を得ていた。そのような彼が3年後にはN県の採用試験を受け、合格後はN県に移った。その理由は何であったのか。彼は在学中から交際していた女子学生がおり、卒業後も二人の愛情は変わりなく強いものであった。この相手の出身地はN県であり、卒業後は郷里で勤めていた。二人の愛情を結実させ結婚を実現させるため悩み抜いた彼は、意を決してN県への転出を考えた。現職の身分で移動は不可能と知り、N県の上級職に挑み成功を勝ち得て、就職し、結婚を果たしたのである。

このように逆境不運にもめげず、自分の信ずる道を堂々と逞しく生き抜いている卒業生は数多く、上述の4君などはほんの一例に過ぎないであろう。退官してはや2ヵ月。在職中の思い出となれば、やはり学生諸君との関わりが多い。その中でこのような多くの偉大な卒業生に恵まれた私は幸せであり、それら諸兄の美しくも力強い生き方を教訓にして、私の餘生を送りたいものである。

定期総会報告

— 昭和60・61年度事業報告ならびに会計報告 —

S 62. 5. 24 於・弘前市

1. 事業報告

- (1) 会員名簿61年版作成、61年11月20日発行
- (2) 支部活動支援 支部創立…秋田支部
開催…福島、関東、下北の各支部
- (3) 会報6号、7号発行
- (4) 新正会員歓迎会後援 2回

2. 昭和60・61年度会計報告

収入の部	59年度繰越金	1,622,465円
	一般会費(971名分)	2,942,450
	入会金(196名分)	804,330
	広告料	80,000
	貯金利子	101,877
	30周年記念誌売上金	25,696
	計	5,576,818

支出の部	会員名簿発行費	1,830,800円
	会報発行費	791,370
	新会員歓迎費	445,680
	支部後援費	316,940
	会議費	276,120
	庶務・管理費	360,125
	通信・印刷費	238,268
	消耗品費	6,958
	慶弔費	20,810
	計	4,287,071

3. 規則改正

評議員数をこれまでの20名以内から25名以内へ変更

4. 新年度役員の改選 (○は新任)

- 会長 ○岩井邦彦(32,弘前市役所)
 副会長 ○中尾良仁(32,青森県庁)、○今 哲広(42,電技工業)
 監事 中村良三(33,青森県庁)、○扇田 実(33,青森県庁)、
 ○三浦 慧(38,三浦酒造店)
 評議員 佐藤 孝(34,青森県庁)、米谷誠治(39,青森県庁)、山崎
 季好(39,青森農試)、鎌倉二郎(39,青森県りんご試)、野
 村忠弘(35,青森県畜試)、栗生和夫(32,青森県畑圃試)、
 丸島 仁(46,青森県中央会)、及川 博(47,青森県農業
 会議)、久保 惇(34,八戸市役所)、桜庭誠策(36,弘前市
 役所)、○吉尾晴雄(35,青森市役所)、木村郁夫(47,きむ
 ら種苗)、蒔苗龍一(45,東北建設コンサル)、成田常雄(33,
 柏木農高)、外崎勇七(34,柏木農高)、大場真紀(38,芝管
 工)、尾崎一美(44,弘前市農協)、原田順厚(31,弘大農学
 部)、○古川高年(35,古川ガラス工業)、○相馬敏光(45,
 佐々木農機)、○渡辺 繁(39,農業自営)、○佐々木武信
 (47,農業自営)、○小槌央邦(40,三本木農高)、○工藤博
 喜(54,尾上農協)、○山田育夫(52,東北農政局)、以上25名。
 幹事 ○戸次英二(33,総務担当)、○村山成治(40,情報担当)
 藤田 隆(45,会計担当)

— 昭和62・63年度事業ならび予算 —

1. 事業計画

- (1) 同窓会名簿(63年度版)を63年11月末に発行する。
- (2) 新支部創設の支援、および既設支部の活動を後援するため教官と役員を要請により派遣する。
- (3) 会報を年1回発行する。
- (4) 新会員(卒業生)歓迎行事を後援する。
- (5) 母校の環境整備のため、2年で20万円(年10万円ずつ)を援助する。

2. 昭和62・63年度予算計画

収入の部	61年度繰越金	1,289,747円	
	一般会計	3,000,000	@ 3,000×1,000名
	入会金	1,300,000	@ 5,000×260名
	広告料	270,000	
	計	5,859,747	

支出の部

会員名簿発行費	2,400,000円	63年度版
会報発行費	600,000	年1回発行
新会員歓迎費	450,000	卒業祝賀会 他
支部後援費	500,000	
母校環境整備費	200,000	植樹後の管理
会議費	200,000	
庶務・管理費	550,000	名簿管理料
通信・印刷費	200,000	
予備費	759,747	
計	5,859,747	

教室だより

《附属農場の紹介》

農場は、南津軽郡藤崎町にある藤崎農場と北津軽郡金木町にある金木農場とからなり、それぞれ学部から車で20分、75分の距離にある。

藤崎農場は、果樹と蔬菜の園芸農場で、その中心作物は地域特産物のリンゴで、面積8ha、品種数120、総本数約1,200樹、年間生産量約7,000箱と、リンゴの教育と研究に質・量ともに万全の体制をもっている。

金木農場は、基盤整備された水田の上に、稲作の機械化一貫作業体系が確立し、単収も安定しており、教育効果も高い。また地力の低かった飼料畑は、厩肥の連年施用によって生産力が増し、少頭数飼育でも飼料不足をかこつたのは遠い過去のものとなり、現在は29頭の乳牛を含む4畜種77頭の粗飼料のみならず、一部濃厚飼料の自給までも可能になっている。

一方、施設設備の整備は昭和57年度から漸く始まり、61年度末までに両農場合せて10施設の建築が進められ、今年6月15日に竣工式が行われた。かくして旧農林省時代(藤崎)、旧青森県時代(金木)の木造の老朽建物は一新された。

主な建物の構造と規模は下表の通りである。藤崎農場では、①40～80人聴講可能な講義室を含む研究管理棟、②ジャム・ジュース・ワイン・味噌などの加工設備を有する加工舎、③大農具舎等が新営され、④冷蔵庫は増築されフォークリフトによる積荷作業が可能となった。金木農場では、⑤総畳数99畳、40人の収容可能な宿泊管理棟を始め、⑥2基のスチールサイロ、パイプラインミルクカー等の設備を持つ32頭係留ストールバーンキング式牛舎、⑦牛舎から圧送される原乳をバック詰

藤 崎 農 場

No.	施設名	建設年度	様式	面積
①	研究管理棟	57	RC2	901㎡
②	園芸加工舎	57	S1	280
③	冷蔵庫	46・57	S1	112
④	大農具舎	57	S1	200

RC：鉄筋 S：木造
W：鉄骨造り 数字は階数

め加工する乳加工舎、⑧育苗作業場、ライスセンターシステム、自給飼料のペレット飼料調製設備室、雨天実習場、その他多くの目的と機能を持つ農産加工調製舎、⑨大小合わせて98機種以上の農機具を収納する農具舎、⑩肉牛・豚・羊を飼養目的に応じてペン構造を変え、単飼・群飼いずれも可能な畜舎等、全て新営された。しかも、国家財政困難な折りにもかかわらず、多くの希望がかなえられ、他大学農場に比して優れるとも劣らぬ諸設備を有し、農場としての新たな飛躍台に立った感がある。

しかし、相離れた2農場とも事業量が大きく、かつ補完し合うことが難しいので、定削の嵐の中での人員不足が最大の悩みである。6次にわたる10人減の定削に対して、その都度作目の変更や一部切捨て、農作業法の改善により、克服してきたが、既に教育、研究機能を阻害する状況まで深刻化している。

教育と研究の実績と実態については、一昨年発行された『30年のあゆみ』に詳しく掲載してあるが、特にリンゴの半密植栽培の研究は、地域農家に直接役立つ成果をも挙げており、年間数千人の見学研修者を迎える状況にある。

以上紙面の都合上、概略を紹介するに留まったが、詳細については全国大学付属農場協議会発行の大学農場年報第19号を参照して頂きたい。

最後に、御来青、御来弘の折りには気軽に両農場にお立ち寄り下さることを願うと共に、同窓会会員諸兄の御発展、御活躍を祈りながら置筆する。

(村山 記)

金 木 農 場

No.	施設名	建設年度	様式	面積
⑤	宿泊管理棟	59	RC2	980㎡
⑥	乳加工舎	59	S1	209
⑦	乳牛舎	59	W2	455
⑧	加工調製舎	61	S1	833
⑨	農具舎	61	R1S1	968
⑩	家畜舎	61	W1	210

支部だより

— 秋 田 県 支 部 発 足 —

1. 支部結成までの経緯

本県における支部結成の気運は以前からあったが、地形が南北に長いことと、県民性が成せる技なのか話が出ては消えの繰り返しであった。

こうしたなかで、昭和61年1月に県農業短期大学の松本氏らの呼掛けで、初めての同窓生新年会が秋田市内で催され、20名が参加した。新年を祝うとともに、同窓生の消息、恩師の消息が話の中心となり、今後、このような機会を持ちたいと言う意見が出され、秋田県支部結成に向けて前進することが確認され、準備委員が選出された。

NHK大河ドラマ「いのち」が放映され、あの懐かしい岩木山、津軽平野、弘前城等々を見るにつけさらに気運は高まった。

昭和62年に入り、準備委員会の名で選挙なみの電話作戦で、支部結成準備会への出席の有無と、支部結成の賛否について問いかけた結果、約70名の有資格者中65名と連絡が取れ準備会参加希望者26名を含め、全員の賛同を得た。

2月7日、秋田市内みずほ苑において開催された「弘前大学農学部同窓会秋田県支部結成準備会」において支部結成案について計

たところ、満場一致で支部結成の運びと成り、その席で支部会則の成立と、支部役員の選出がなされた。

2. 支部の内容

会員相互の親睦を図ることはもちろん、会員名簿の作成等については他支部と同様の活動を行う。

秋田県が南北に長いので、支部の事務局員を県北、中央、県南に配置し、支部の活動をスムーズに行えるよう配慮している。

支部役員も各年代、各教室出身者といった具合に教室全般に求めた。

先輩、後輩のなかにあつて、皆同じ釜の飯を食った仲間としてお互いに率直に意見が言える支部である。

(準備委員 丹波 記)



— 関 東 支 部 (北 溟 会) —

61年6月21日、北溟会総会に出席する機会を得た。当日はゲストに木村文理学部東京同窓会事務局長も出席されていた。33卒笹島、35卒安倍、勝間田氏ら25名を越える会員が参加されていたと記憶する。

30年代から50年頃の会員の中では卒業後初めて会う懐かしい顔もあり、適度に進む酔いのせいも加わり、壇論風発、話がはずんだ。見ていると話の渦がクラブのあちこちにでき、渦の中の顔ぶれが、しばらくすると変っている。卒業年次にこだわり無く、話がはずんで

いることを知ることができ、同窓であると言うことは現在の仕事に関係なく社会人としての会話に花を咲かせる。これが同窓会なのだと思わず感じたのであった。

1年に1度か2度の、このような会への出席は人をいくらかりフレッシュしてくれるのではなからうか。

翌日の日曜日早朝、久しぶりに明治神宮に友達と行き、盛りの花菖蒲に堪能した反面、延々と続く人の列に疲れ果てたのであった。

(篠辺 記)

— 福島支部 (わんどの会) —

思いがけなく福島県支部同窓会の出席の依頼で郡山へ出かけました。教室の卒業生は2人だけですので、出席はいささか気が重かったのですが、支部長さんをはじめ皆様の温いおもてなしを受け楽しい思い出になりました。福島県支部は支部長以下、役員御一同のチームワークもすばらしく立派な同窓会であることを感じました。各地にこの様な組織ができることは農学部発展につながると思います。もう一つ印象深かったことは、農学部校舎の

古い写真にかん声をあげていたことです。今後この様な会合に出かける教官の方には是非30年の歩みをスライドにしたものを持参できるようになることを望みます。金木農場や藤崎農場の移り変りなどは新旧の卒業生に深い感動を与えるでしょう。どうか事務局の指導によって各地に同窓会支部が設立されることを望みます。最後に福島支部の皆様の御多幸をお祈りし、支部の一層の発展を祈念致します。(沢村 記)

— 下北支部総会に出席して —

年末・年始は暖冬少雪でしのぎやすかったが、去る1月10日の下北支部総会出席の帰路は雪で大変でした。総会そのものは、むつ市を中心に下北半島在住の同窓生20名中、昭和33年卒業平井正和氏、都谷森五郎氏をはじめ、教員3名、下北地方農林事務所2名、農業改良普及所4名、むつ市役所2名、東通村役場1名、肉用牛開発公社1名の計13名が出席し、市内料理店「王将」でシーフードを前にして挨拶、自己紹介等が続き懇親会に移り、アルコ

ールがまわったところで記念撮影。二次会も全員参加で氣勢をあげたところまではよかったが翌朝起きてびっくり。夜半に静かに降った雪が何と20センチもあり、日曜日であったことから除雪の行き届いてない道路を150キロ走りやっとの思いで弘前に帰ったが、雪道ドライブの思い出は強烈に残ります。下北支部の皆さんに感謝すると共に今後の発展を祈って止みません。

(横山 記)

編 集 後 記

本州はすっぽり梅雨に包まれてしまい、うっとおしい毎日が続いておりますが、植物にとっては真に恵みの雨となりそうです。

本学部同窓会も役員の顔触れが一新し、一昨年の30年記念事業で農学部が新しい第一歩を踏み出したとするならば、我同窓会としては今年からが新たな「あゆみ」を始めたということになるでしょう。

本当に長期間会長、副会長の任をお引受けいただきました横山宏、土岐政雄両先輩には心より感謝いたします。会報担当も次号から村山氏(情報担当幹事)にバトンタッチいたします。引き続き御協力の程よろしくお願い致します。(6.20 A・K 記)

学 内 人 事

佐々木信介教授 退 官

慶 事

佐々木信介教授
青森県褒賞 (S 61.12.4 受賞)

弔 事

田中 優 (43・園芸産物利用学卒)
中村 俊也 (45・農業水利学卒)
平山 弘美 (62・農業造構施設学卒)